





氏鶏太

ろばん侍

講談社

© 1968

KEITA GENJI

第1刷 昭和43年8月8日

定価300円



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

そろばん侍

著者 源氏鶏太

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京3930

電話東京(942)1111(大代表)

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 有限会社馬場製本

目次

波

精力絶倫物語

続・精力絶倫物語

勇氣凛々

喧嘩太郎

そろばん侍

出世芸者

最後の芸者

大出世物語

5

23

39

77

107

143

161

177

207

装
幀
永
田
力

そろばん侍

波

私は、数え年三十三歳の昭和十九年六月から終戦になるまで、海軍に応召していた。私は、その間、自分で自分の無能振りにあきれ、自分を人間の屑のように思い込んで一日一日を、ただ、小心翼翼として過した。机上の仕事になら多少の自信はあったのだが、海軍では、私を防空壕掘りにまわしたのである。ツルハシはロクに振れぬし、大工仕事の真似事すらも出来ぬ自分を、私は、日夜、なげき悲しまねばならなかった。もし、生きて還れることがあったら、自分の子供に、下士官の散髪ぐらいは出来るような、理髪技術を習得させておくことが、せめてもの親ごころというものであろう、と信じていた。

しかし、私は、応召になったことを、今となって、それほど後悔はしていない。もう一度、といわれるのは絶対に困るけれども、いい経験をしたとも思っている。中でも、忘れられないのは、岡部水兵長のことである。私は、海軍で接したたくさんの人人の名は、この岡部水兵長以外は、全部、忘れてしまっている。自分でも、不思議なほど、思い出せない。多少は懐かしく思う顔もいくつかあるのだが、どうしても、その名が浮かんでこないのに、岡部水兵長だけは、特別なのである。

二

いきなり、私のうしろから、下士官の怒声が浴びせかけられた。

「この野郎ッ。三十面をさげて、そのザマは何んだ。ようし、貴様はやる気がねえんだな。日本海軍というところはとうとうとわかるところか、わかるまで知らしてやる。あと、百回振ってみるんだ。途中でへバツてみる、半殺しにしてやる！」

「はい。」

私は、情ない声を出した。その日、私は、生れてからはじめて、ツルハシを振ったのである。息がつまるように天井の低い、足場の悪い防空壕の中であつた。すでに、私の腰はふらつき、汗が流れて、手許が狂い勝ちになっていた。それでも、齒を食いしぼるようにして、十五分以上も、ツルハシを振っていたのである。あと三分もしたら、恐らく、ぶったおれてしまうだろう。が、そんな私の姿は、下士官の眼に、醜態の限り、とうつたのに違いない。

「一回……、二回……」

うしろで、下士官がいつている。私は、眼がくらんで来た。すでに、ツルハシは千鈞の重さとなつていた。そのツルハシに私の方が、逆に振られている恰好である。おおいかぶさるように迫る黒と茶にまだらな岩の裂け目を目がけているのだが、いつも、見当が二寸以上も狂い、ツルハシははじき返され、両腕がじんとしびれている。

「四回……五回……」

私のうしろには、下士官のほかに、私と交替でツルハシを振らなければならぬ何人かの兵隊

が、呼吸をひそめていた。私と同じ、応召の一等水兵たちである。

岩のかけらが、火花を散らして、飛んで来た。しかし、すでに私は、顔をそむける程の機敏さを失っていた。額のあたりに、遠い感覚で一瞬の痛さを感じただけであった。

「……八回。」

何かねっとりしたものが、その額から流れはじめたようだ。血？　しかし、それをたしかめて見ることは、無論、許されなかった。

「……十回、あと九十回。」

とたんに、私の腰が崩れて、足許が泳いだ。ツルハシが、私の手からすりりと抜けて行った。

「この野郎ッ。」

下士官の近寄ってくる殺気立った気配を感じながら、私は、両膝をガクンと落してしまった。半殺しにされる！　私は、滝のように流れる汗の中で、荒い呼吸を続けながら、観念の眼を閉じた。

「もうええが。やめとけ。」

底力のある別の声が、聞えたようだ。

「その兵隊を殺す気かよ。おい、その兵隊。暫く外へ出て、休んでこい。」

下士官は、なにかいいかけたようだが、

「次ッ。」

と、不満そうに交替を命じた。

私は、ふらふらしながら、防空壕の外へ出た。まるで、嘘のように秋晴れのいい天気であった。

私は、綿のようになった身体で、そこに腰を下した。額を紙で拭くと、血がついて来た。私は、それをじいっと見つめながら、行末について、泣きたいほど絶望的になっていた。

それにしても、さっき、私を救ってくれた男は、誰であろうか。まさに、地獄で仏、であった。

私は、数日前に、三ヵ月間の海兵団教育を終って、この舞鶴防備隊に配置されたばかりなのである。しかし、あのずんぐりふとった男の顔には、見覚えがあるような気がしていた。たしか、私と同じ五分隊であった。あんなに猛りたっていた下士官も、あの男の言葉には、そむくことが出来なかった。

そのとき、防空壕の中から、その男が、帽子をあみだにかむり、よれよれの作業服のズボンの腹に両手をつっ込んで、外の明るさに、まぶしげに眼を細めながら出て来た。

私は、立ち上り、敬礼をしながら、

「兵曹、さっきは、有難うございました。」

その男は、ジロリと見返して、

「わしは、岡部兵長じゃよ。」

と、いったのである。

兵長？ 私は、聞き違えたのか、と思った。が、帽子には、下士官のしるしである黒線がはいっていなかった。しかし、さっきの若い下士官を叱りつけるようにいったこの四十五、六歳の男が、ただの兵長とは、すくなくとも、階級がすべてである軍隊の常識からして、考えられないことのように思われた。

「お前は、いくつじゃ。」

そういうことを聞いたから、岡部兵長は、そう固うならんでもええ、まア、すわれや、といった。私たちは、日向に並んで、腰を下した。あきれたことには、岡部兵長から、酒の臭いがした。

「その身体で、防空壕は無理だな。しかし、さっきは、お前の身体にしては、よう頑張ったよ。」

若い少尉が、見るからに生意氣そうな様子で通りかかった。私は、あわてて立ち上り、敬礼をした。が、岡部兵長は、気付かぬように横を向いていた。少尉は、顔色を変えて、近寄って来た。「貴様ッ、何んで、敬礼をせんのだ。」

岡部兵長は、よいしょというように立ち上り、ほんの申訳程度に右手をあげた。

「貴様の名をいえッ。無礼な奴だ。」

「五分隊、海軍水兵長岡部金松。」

そういつて、岡部兵長は、ジロリと相手の顔を見た。

「何？」

少尉は、思いあたるところのあるような表情を示したが、もう一度、岡部兵長を睨みつけると、不機嫌そうに去って行った。

「いいんですか、岡部兵長。」

「ふふふッ。司令のところへ行ったら、岡部金松が、どういう男かわかるじゃろうよ。」

私は、大きなおどろきを以て、岡部兵長を見直さずにはいらなかった。五尺三寸ぐらいであ

ろう。円顔が赤銅色にやけていた。眼の玉は、茶色がかってちいさい方だが、どうかしたひょうしに、底光りをするようだった。それは兵隊というよりも、土方の親分といった方が似合う。そのくせ、どことなしに、ひょうひょうとしたユーモラスな味がそなわっていた。

しばらくたって、こんどは、中年の大尉が近寄って来て、

「じいよ。」

と、笑いながらいった。

「新任のM少尉が、プリプリしとったぞ。」

岡部兵長は、ニヤリと笑って、

「わたしは、何んにもしませんぞ。」

「わしからいっておいた。岡部のじいにだけは、命知らずだで、うかつに手を出さん方が安全だとな。ところで、わしんとこの防空壕、どうも水が出て困る。いっぺん、見に来てくれんか。」

「うん、あそこは、水が出るぞよ。でも、もうすこし先へ進んだら水が切れるで、兵隊には可哀そうだが、裸にならして、全速力で、あそこを過ぎるようにすることだ。」

「そうか。とにかく、後で来てくれ。兵隊たちも、じいに見て貰いたい、といっている。」

「R大尉。」

岡部兵長は、ふっと、笑顔になって、

「どうも、酒がきれたでう。」

「よしよし、後で、清酒一本、届けとく。」

大尉が去ったあと、岡部兵長は、

「真面目に働いとったら、そのうちに、わしが、ほんとかしてやるでろう。」
と、私にいつてから、さっきのように、ズボンの腹に両手をつつ込んで、のっしのっしと歩いて行った。

三

その後、私は、岡部兵長は、大正八年の兵隊で、昭和十九年二月、四十五歳で応召になったのだ、と聞かされた。大正七、八年といえは、日本海軍でも、最もきつく兵隊を鍛えていたじぶんだそう。近頃のように、数年で下士官になれる二十三、四歳の兵隊とは、身体に仕込まれた筋金の違うことは当然だが、それにしても、この防備隊における岡部兵長の占めている地位は、傍若無人といつていいものだ、と後で知った。岡部兵長の同年兵の中には、すでに兵曹長から中尉にまでなつてゐる者があつた。しかし、彼は、あくまで、一水兵長に過ぎない。だから、乳くさい二十一、二歳の下士官から往復ビンタを食つたところで、一言の文句もいえない筈だし、現に、そういう実例を、私たちは、毎日のように見ていた。にもかかわらず、岡部兵長だけは、特別であつた。この防備隊では、岡部兵長に対して、面と向つて文句のいえる下士官は一人もいないし、士官ですら一目おいてゐる、というのだ。それどころか、岡部兵長のところへ、防備隊司令のO大佐から清酒一本が届けられたことがある、という。

いったい、どうして、そういうことになったのか。そして、その後、私が、岡部兵長について耳にしたことは、だいたい、次のようであつた。

その頃、戦況の不利とともに、防備隊では本格的な防空壕が絶対に必要であつたし、その完成

について、鎮守府から矢の督促を受けていた。司令のO大佐の面子にもかかわる問題になっていた。防備隊の裏山一帯に、大防空壕を掘る計画が立てられた。医務室、防空指揮所、無線室、兵員室……と、それは今までのように、兵隊が逃げ込むだけの穴ぐら程度のもではなく、二段掘り三段掘り、そして、そのあとをコンクリートで固める、といった本格的なものであった。となれば、最早、素人ではどうにも手がつけられない。専門的な知識と技術、そして、度胸が必要であった。

ただちに、部内から、その資格のある人間が求められた。

当時、岡部兵長は、応召二ヵ月目で、自分の子供のようにな若い兵隊たちの間で、五分隊の甲板助手として、年寄くさい、まことにバツとしない存在であったらしい。若い下士官にガミガミといわれても黙っているし、夜の整列にも並んで説教を聞いていた。

五分隊長S大尉は、全員を集めて、防空壕掘りの設計監督について、自信のある者は、申出るようにいった。そのとき、岡部兵長が、

「わしがやります、分隊長。」

「やれるか。」

「わしは、山師もやったし、炭鉱にいたことも、土木もやったこともありますけに、やれるじゃろう、と思います。」

「よし、すぐ、司令のところへ行こう。」

その結果、岡部兵長が、いろいろの質問を受けたあげく、やらされることになった、という。更に、その席で、

「ゆうときですが、こういう仕事は、土方になった気でやらにゃアいけません。わしに、軍人土方になってええ、といわれるならやります。」

と、いったということだ。

磊落な〇司令は、並んでいる士官たちの前で、よろしい、といった。すると、岡部兵長は、「防空壕のことなら、司令の意見も、ときには無視しますが、ええですか。」

こんどは、〇司令も苦笑したらしい。

防空壕工事は、事実上、岡部兵長の指揮によつて、昼夜兼行で開始された。各防空壕は、各分隊に割当てられ、岡部兵長は、そのすべてを見てまわった。各分隊は、その名譽にかけて、工事の完成を急がねばならなかった。工事が難関にぶつかると、夜中にでも岡部兵長は迎えられた。そしてその的確な指示が、たいてい成功した。そうになると、はじめは、岡部兵長に対して、好意を持たなかった士官たちも、嫌でもその機嫌を取らなければなくなってくる。それに話してみると、どことなしに愛嬌があった。岡部兵長は、娑婆にいたときには、妾が何人かあつて、道楽の限りをつくした、といつていた。北海道で、人を斬つて、監獄へいれられたともいつていた。たしかに、そういう男に見える。だから、うっかり怒らせたら恐ろしいが、上手に扱えば、たのもしい男なのだ。酒は、無類に好き、と来ている。そんな岡部兵長から、ニコニコ顔でたのまれると、いやでも、清酒一本を届けなければならなくなる。だから、岡部兵長は、酒に不自由をしなかった。いつも、一升瓶の三、四本を持っていて、自分も飲み、下士官たちにも飲ませていた。

岡部兵長は、各分隊でも、いちばん骨のありそうな下士官たちに、みっちりと防空壕工事のことを仕込み、だんだん、それにまかせるようになった。